

シベリア抑留生活の思い出

静岡県 後藤 光義

昭和十六(一九四一)年三月、富士宮市富士根尋常高等小学校 高等科二年卒業

昭和十六年四月一日、満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所へ入所。第四次第四十七中隊第四小隊の一員となる。団体生活の始まりです。三カ月の訓練が終り伊勢神宮へ参拝後、敦賀港より船出する。清津港へ寄り羅津港へ上陸。汽車に乗り豆満江を渡り満州国(現中国東北部)へ入る。延吉・奉天(瀋陽)・新京(長春)・ハルピンを経て一面波義勇隊訓練所に入る。時七月六日であった。

その後九月五日、国境の黒河大額義勇隊訓練所へ入所。はるかにソ連の岩山の見える所で三カ年の訓練が終り、昭和十九年春、訓練所より山の中に入った。阿拉浜に薪と泥で壁を作り、草屋根で作った家を作り、龍北義勇隊開拓団と名付け荒地

を開拓した。

昭和二十年五月二十二日、現役兵として黒河省瓊瑤県山神府の野戦重砲二百六十九部隊に入る。輓馬部隊で馬の手入れが大変だった。六月末、師団でチチハルまで行軍、約六百キロメートルの行程であった。七月二十日頃、部隊の編成替えて第百四十九師団野砲第百四十九連隊となる。同年の初年兵が大勢、外の部隊へ転属となる。

八月九日、ソ連軍、満州へ進攻。部隊も三回、空爆に遭うが大した損害はなかった。ハルピンを守るため汽車でハルピンへ向かう。一つ手前の駅で八月十五日終戦となる、そこで武装解除。

ハルピンより汽車と徒歩にて海林へ。途中避難の婦女子の校庭に居るを見るが、どうする事も出来なかった。また激戦の後を歩く馬、人の倒れているのを見る。悲惨この上なし。海林から牡丹江へ。牡丹江では食料探しに行った時、トウモロコシを包んで置いた上衣を取られ、「この野郎」と追いかけたら十メートルぐらいの所で振り返りざま

マンドリンを六発発射される。足もと一メートルぐらいの所だった。手を挙げるとそのまま行ってしまった。まともに射たれたらと思うと寒気がした。また火葬場の前を通った時、四百人ぐらい並べた死人があり、悲しい。これが戦争に負けた国の哀れさか。

十月一日有蓋貨車、中は二階になっている。いよいよウラジオストックより日本へ帰れる、嬉しい、と皆喜んだ。夜中に国境を越え、朝暗い中に駅に着く。石炭と水を積むための停車だ。駅員が来たので汽車の進行方向を指さしウラジオ、ウラジオと叫ぶ。駅員はモスクワ、モスクワと指をさす。これは騙されたと思ったが仕方がない。思えば武装解除の後、上官が日本へ帰れるから逃げるなよ、逃げると重営倉だと言ったのは、一人でも多くシベリアへ送るためだった事がやっと分かった。北へ向って走る中、濁流渦巻く黒龍江の長い鉄橋を渡り西へ西へと走り、大きな湖に出る。バイカル湖だ。湖畔に停車すると湖水をくみ、飲み

水とする。

十月二十日タイセット駅に着き下車、すぐ行軍。三日ぐらいかかって百二十四キロメートル地点の板塀とバラ線の二重の囲い、四隅に望楼の有る収容所へ入る。前から囚人を入れてあった様子だった。始めは仕事は少なく、氷が張るようになってから鉄道の路床作りだ。湿原の十センチぐらい凍ったのを鶴嘴で割りモッコで外へ運び出す重労働だ。三日目の日に身体検査有り。三級となり営内作業となる。南京虫と虱に毎夜血を吸われ、食べる物は少ないのでやせて当たり前。三級になって良かった。営内掃除中、収容所の入口近くにある小屋の戸が開いていたので中を見たら、身に何も付けず禿さえも付けない裸の死体が十六体あり、何とも仕方なくただ合掌するのみ。

その後百七キロメートル地点の収容所へ移される。そこはあちらこちらから三級者が集められた所だった。チチハルで別れた静岡市の増井君、山口県の川本君と一緒に班になり色々の仕事をした。

昭和二十一年一月十日、便所へ行こうと外へ出ると昨日までと違う。出た途端に顔が痛い、空気が凍ったような感じ、太陽はぼんやり。ペーチカの煙突の煙は少し上った所から横になり、屋根に沿い下り、地面へ付いた所で消えている。動きは全くなく静かだ。外の寒暖計は零下五〇度。下を指す目盛りは零下五〇度までしか無く、本部に問い合わせたら零下五九度だそう。十日間続いた。零下四〇度以上は仕事は休みだったが便所へ行くのは命がけだった。

辛かった事は、毎日の点呼で五列縦隊に並んで数えるのに何回数えても数が分からないらしく、四十分も五十分もかかるので、寒い時は足踏みと手揉みをしていないと凍傷になるので辛かった。六月になり木の芽も膨らみ青葉が出始めると、白樺の幹にV字の傷を付けて樹液を取り飲んだ。夏になるとロシア鎌で草刈り作業に行く。ブヨが多くて、頭から目の所だけ蚊帳で見えるようにした頭巾を被り草を刈る。食事の時には困った。北海

道出身者がいて、これはアイヌ葱だと教えられ、取って食べた。食べなかつた者に臭い臭いと言われ困った。小指の頭ぐらいの小さい百合の根も掘って食べた。毎日の食事は少ないので少しは役に立ったと思います。

八月、収容所を出て三十人で三十日間、草原に草屋根の小屋を作り、草刈りに行った。休日に食べ物探しに行った時、黄色の木苺があり沢山食べ、飯盒に一杯取って帰り皆に分けた。また茸も赤や青、色々あり、ロシア人は木に生えた茸は食べない事も分かった。草刈り作業が一番良かった。草刈りが終り線路の枕木切りの仕事となる。作業場の近くの小山に四十余りの十字架がある。仲間が死亡し埋められたものだ。合掌。

二十二年三月、トラックから丸太を降ろす仕事中に丸太に右足首を挟まれ三級となり、管内作業となる。その内、別の収容所へ移送された。その頃、前に居た収容所の伐採中隊六十人が茸を食べ全員が食中毒になり病院へ。その中の二十人が死

亡し、二十人までダモイ名簿を書いた時、この人達は食中毒だから治れば仕事が出来ると二十人は残された。二十人のダモイ組は私等と一緒に復員した。

七月一日、ナホト力着。六日、永禄丸乗船。十日、舞鶴に上陸。十五日昼過ぎ、自宅に帰る。

シベリアで死んだ同胞の冥福を祈り、一日も早く遺骨の収集、帰国を願い、筆をおきます。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十五年十一月十五日

学歴 富士郡富士根村尋常高等小学校卒業

職歴 農業

家族構成 母(死) 妻(死) 長男、長男嫁、

孫、妹

軍歴 昭和二十年二月二日 旧満州山神府

二六九連隊入隊 終戦に到る

終戦抑留歴 タイセット百二十四キロ一〇七地点

の収容所

復員日 昭和二十二年七月舞鶴上陸

復員後の職業 農業、洋服店経営

(静岡県 熊谷 精一)